

[研究ノート]

## 支配的民族-階級

——ブリアンによるアケメネス朝帝国支配分析の操作的概念——

佐藤 進

- <目次> はじめに
- 1 「支配的民族-階級」とは
  - 2 ブリアンの分析
  - 3 若干の検討

## はじめに

1970年代半ばから80年代にかけて、私の関心がしばらく古代イランから離れていた間に、アケメネス朝帝国史研究に注目すべき動きがいくつか起こっていた。オランダのフローニンゲン大学サンチシ・ヴェールデンプルフ女史を組織者とするアケメネス朝史研究集会 (Achaemenid History Workshop) もその一つであり、最近、第3回(1983年)から第7回(1987年)までの研究集会報告集5巻(AH I 1987~AH V 1990)が公刊されている。これを機会に、私は勉強の仕直しを兼ねて、研究集会の活動を追跡してみた(『オリエント』1990)。

研究集会は、1970年代に現れていた新しい方向をまとめ、それをさらに発展させようとする試みと言える。それは「学際的基礎に立つ、統合された研究装置の創設」であり、何よりもまず、次の三つの目標が設定された。第一は、学際的、あるいはむしろ多学的接近方法 (multidisciplinary approach) の活用である。第二は、ギリシア中心主義的なアケメネス朝史観の克服である。そして、第三が方法論的問題の検討であり、とりわけ構造的接近方法 (structural approach) が強調された。

この第三の構造的接近方法においてもっとも注目されるのが、フランスのトゥールーズ大学古代史教授ブリアンである。彼は第3回から第5回まで毎回報告しているが、とりわけ私にとって興味深く思われたのは、彼がその中で提起している「支配的民族-階級」(ethno-classe dominante) という概念である。次に、この概念について紹介し、あわせて私の考えを述べてみたい。

### 1 「支配的民族-階級」とは

ブリアンが「支配的民族-階級」という概念を提示したのは、研究集会が初めではない。それは、すでに1976年の研究(RTP [1978]: 261~2)に現れており、しかもアケメネス朝帝国ではなく、ヘレニズム時代に関して用いられていた。そこで彼が論じていたのは、セレウコス朝の植民市建設における新しい支配階

級の形成である。アジアに建設された都市において、ギリシア・マケドニア人が市民的特権を享受し、土着民を排除した閉鎖的な共同体が確立される。市民的特権の享受は、クレロスの占有に結びついていたと考えられる。そこでは、ギリシア・マケドニア人と土着民との関係、都市と農村との関係が、そのまま支配者と被支配者との関係になる。すなわち、ギリシア・マケドニアの征服と植民は新しい階級関係の成立をもたらしたのであり、「槍」によって土地と住民を自由に処分する権利を獲得し、都市化に結びつく特権を保持した「民族的に同質」な支配的少数者の層を出現させた。ブリアンは、それを「支配的民族-階級」の用語によって特徴づけたのである。

「アジア的ヘレニズム」社会の分析において構想された「支配的民族-階級」概念 (cf. *RTP* [1982]: 263) がアケメネス朝帝国に適用されたのは、私の知り得る限り、1981年の『パンセ』寄稿論文 (*RTP* [1981]: 489) においてであった。しかし、ここではただ一度、しかも何の説明もなしに使われているにすぎない。それが具体的に論じられるのは、アケメネス朝史研究集会の報告においてである。

「民族-文化的多様性を何より第一の特徴とする国家において、大王と支配的民族-階級が諸地域・住民に及ぼす権力の様相と強度の問題」(1987: 1)こそ、帝国支配構造の解明にとって決定的である。こうして、第3回研究集会では、「支配的民族-階級」が中央権力と文化的多極性とのかかわりにおいて取り扱われ、第5回研究集会では、「支配的民族-階級」と従属民族との関係がエジプトの事例について考察される。後者の報告の中で、ブリアンはアケメネス朝帝国における「支配的民族-階級」について説明しているので、それをまず引用してみよう。

「支配的民族-階級とは、歴史と忠誠教育により固められた共通の価値によって、また奉仕／贈与／奉仕の交換に基づく関係によって、大王の周囲に統合されたペルシア貴族階級のことである、という風に私は解釈している。それはまた、共通の利害によっても結びつけられている。なぜなら、この小さな支配層(ペルシア社会も同様に支配している)は、宮廷や軍隊、サトラブ領を管理する高職をたがいに分けあっているからである。支配的民族-階級は、政治的-文化的

自己同一性に固執し、とりわけ、諸国・諸民族の征服と搾取から得られたイデオロギー的、政治的及び経済的特権を永続的に維持しようとする。それは、被征服民の権力を分有しようとも、帝国の『るつぼ』に溶けこもうともしない。局地的協力の要請や文化受容の現象（その度合いや性質は地方によって多様である）にもかかわらず、王とペルシア人は、宗教的領域を含めて、彼ら固有の文化をすべて保持しようとする。」(1988：137)

つづいて、彼は述べている。「この概念は、現在、とりわけ帝国のダイナミクスの分析にとって操作的であるように思われる。それはまさしく『操作的概念』であり、すべての矛盾を奇蹟的に解くことを（見かけの上で）可能にする『万能の鍵』ではない。概念は研究の道具であり、しかも、研究の進歩がかかる概念を確認し、あるいはまた放棄し得るのである。」(1988：137～8)

## 2 ブリアンの分析

アケメネス朝帝国が「雑多な異質の諸地域と住民全体に対する支配を、いかにして2世紀以上にわたって維持することに成功したかを理解すること」(1987：28)が、ブリアンの基本的な課題である。「支配的民族-階級」概念は、まさしくこの課題を解くための、彼によってととのえられた一つの分析用具と言えよう。第3回研究集会の報告はその具体的な適用例であり、次にその内容を概観してみることにしたい。

中央集権と地方分権という、形式的には矛盾した二つの実体が、絶えず相並んで帝国に存在しつづけた。この事実にさいして、「真の問題であり真の難題は、むしろ、両者がアケメネス朝帝国の相対的永続性を可能にし、また支えるように、いかに相互に作用し、反応しあうことができたかを理解することである。……これら二つの実体は、相互に排除しあうものでも、きちんと重ね合わされ得るものでもない。それどころか、中央権力が十分な手段を用意する限り、両者は相互に補完し、強化しあうことが可能である。」(1987：3) アケメネス朝の政策は、「秩序と安定の維持」である。「ペルシアの行政は、秩序維持が必要の場合には別として、公的に存在を承認した、(ペルシアとは)異なったタイプの共同

体内部の問題に、直接干渉しようとはしない。」(1987:4)「中央権力と地方権力との間の関係は、成文化された、または慣習的な契約、あるいは協定によって調整されている。」(1987:6)

考古学的資料は、帝国各地においてペルシアの文化的影響がいかに乏しかったかを証している。それは、「彼らの民族-文化的、したがってまた政治的な特殊性の保持に深いこだわりを示したアケメネス朝とペルシア人自身によって求められ、また適用された政策の映像」(1987:12)にほかならない。「共同体の純粋性は、支配的民族-階級の威信と権力の維持にとって、必須条件の一つ」(1987:12~3)であった。

しかしながら、「共同体の純粋性」や「政治的-文化的自己同一性」に固執する「支配的民族-階級」の内在的要求と、それを強く反映させた政策にもかかわらず、矛盾を避けることはできなかった。帝国支配は、地方的エリートとの間の協力関係を必要とした。協力関係の持ち方は地域によって異なるが、地方的エリートと土着したペルシア家族との接触が深まるにつれて、一方では、プラタークの『リュサンドロス伝』(3,3)が語っているような「エフェソスのバルバロイ化(ペルシア化)」が起り、他方では、サルデイスの碑文が証しているように、ペルシア人の異教崇拝を禁止しなければならないような事態が現れてくる。また、ペルシア高官と地方的エリートとの通婚もまれではなく、当然のことながら、彼らの間に連帯意識が生じてくる。このような複雑な交差した関係の成立は、「ペルシア指導者と地方貴族との間の利害共同体に基づく遠心力を生み出し、顕在化するのに有利にはたらいた。換言すれば、中央権力に対してますます自律的な地域的ペルシア権力の形成に向かって進展していった。」(1987:19~20)

矛盾はまた「支配的民族-階級」の再生産それ自体のうちにもひそんでいた。上述されたように、大王の周囲にペルシア貴族を結びつけていた要因は、一つは「歴史と忠誠教育により固められた共通の価値」であり、他は「奉仕/贈与/奉仕の交換に基づく関係」であった。王に対する忠誠は民族に対する忠誠の上位に置かれ、王は贈物によってペルシア人の奉仕に報いた。そこには、「物及び栄誉の経済的及び象徴的価値によって確定された、王の贈物の序列」(1987:24)

が存在した。ところで、「かかるシステムは、絶えず忠誠と献身の行為を示さなければならぬペルシア指導者すべてにとって、状況の不安定を意味し、またそれを創り出す。その反対の場合、——王の使者の報告によって、あるいはライバルの密告によって暴露されて——彼らの官職は取り上げられるであろう。……懲罰、あるいは単なる非難でさえ、それを被ることの恐怖は、しばしば褒賞の期待よりも強かった。かかる恐怖は、帝国高官の活動に麻痺状態をもたらした。」(1987:27)そればかりでなく、彼らの間には並はずれた競争、策略、阿諛が横行するようになり、「そこから、サトラプと王の側近との間に、際限のない勢力争い」が生ずる。「王の心が離れるや、ペルシア人は、釈明のために有罪宣告を受ける危険をおかして宮廷に出頭するか、あるいは反乱を決意するか、二つの解決方法しか有しない。」(1987:25)

王に対する忠誠が民族に対する忠誠に優先する原則にもかかわらず、二つの忠誠は時により矛盾した作用を引き起こした。「(王の) 垂直的階層組織と先在(民族の) の水平的階層組織」(1987:25~26) を、相互にはっきり区別させておくことは難しかった。なぜなら、「貴族階級のペルシア人は、王との関係によって、同時にまた彼の家族、民族、部族との関係によって、その地位を決定した」(1987:26) からである。しばしば、サトラプや軍事的職務は世襲され、家族成員の間から部下を選ぶ慣習(ヘロドトスVIII, 130) も一般的であった。王は任免権を失うことはなかったが、職務の「王朝化」が進行した。それは、「中央権力に対する反乱の場合に、大いに危険になった。なぜなら、分離するのは個人ではなく、民族全員であったからである。」(1987:27)

これらの矛盾は、アケメネス朝帝国支配にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

「中央権力にとって危険の一つは、数世代このかた州に土着したペルシア家族と地方貴族との間の、活力ある強固な連帯性の展開であった。……真の危険は、ペルシア人が——地方的連合に支持されて——個人的な領国を専有しようとする企てであった。……しかしながら、概して諸州のペルシア人は、文化的及び政治的に深くペルシア人であることを自覚しつづけた。」(1987:29) 「支配的民族-階級」の地方化の傾向も、「システム進化の徴候」であり、「破産の徴候と

は言えない」(1987: 21)のである。かくして、ブリアンの総括によれば、「支配的民族-階級」のシステムは、アレクサンダー大王の征服によってアケメネス朝支配が終るまで維持されたのであり、「デカダンスについて語ることは困難であるように思われる」(1987: 29) という。

### 3 若干の検討

ブリアンも明言しているように、「支配的民族-階級」が操作的概念であり、研究の道具であるとすれば、その有効性が検討されなければならない。まず、前節の適用例について考えてみたい。

報告に提示された分析結果は注目すべきものを含んでおり、すでに彼の示唆に基づいて、新しい研究が現れているほどである。最近、アルタクセルクセス 2 世時代のいわゆる「サトラブ大反乱」を取り扱ったワイスコフは、この出来事について、通説のように王に対する反乱として捉えるのではなく、「一連の、局地的な、しかし相互関連した内紛」にすぎず、「アルタクセルクセス 2 世は何らの脅威も受けなかった」(1989: 13)としている。彼によれば、「アケメネス朝の官吏にとって、その政治的及び社会的地位はプライドの問題であった。……地位の低下は不快の原因であり、最悪の場合には、公然たる戦争の原因となった。」(1989: 16) このような理解は、明らかにブリアンによって素描された「支配的民族-階級」の特徴を前提としている。しかも、ワイスコフは、「360 年代は混乱の時代であったとは言え、アケメネス朝支配における衰退の時期を表しているのではなく、むしろ、行政的慣行や問題において、数十年来の重大な連続を示している」(1989: 97) と述べて、ブリアンの結論を追認している。

私自身、ブリアンの説明に同意するところが少なくなかったが、同時にまた、疑問も残らないわけではなかった。もっとも素朴な疑いは、「支配的民族-階級」の矛盾が帝国後半期に顕著になっているにもかかわらず、その意義を認めようとしていないことである。私は、その時期に「何らかの変質過程」(『オリент』1990: 157) を想定しているが、その検証は今後の課題とされるであろう。そのさい、ブリアンだけではなく、ワイスコフの主張もまた、あわせて確かめられ

なければならない。

「支配的民族-階級」は、帝国のダイナミクスを分析するための操作的概念である。ダイナミクスは、矛盾の解明においてもっともよく捉えられるであろう。アケメネス朝帝国支配の矛盾の一つは、王制と氏族制との間に存在する。ついでに言えば、「垂直的階層組織」と「水平的階層組織」の用語は、ここでは必ずしも適切ではない。「支配的民族-階級」の再生産を支える「歴史と忠誠教育」や「奉仕／贈与／奉仕の交換」は、実は王制に先立つ、氏族制の伝統でもある。王制の成立とともに、忠誠の対象が氏族を超えた王に移しかえられ、贈与者の地位も、複数の族長から王ひとりに独占的に集中する。しかしながら、ブリアンも述べているように、アケメネス朝の王制は氏族制を完全に克服したわけではなく、二つの忠誠が複雑にからみあって作用しつづけた。このような展開は、王制を前提として組み立てられた「支配的民族-階級」の概念からは、十分に説明され得ない。

同じようにまた、ペルシア人の地方的エリートとの連帯強化や異文化受容の傾向も、「共同体の純粋性」を強調し、排他的な性格を付与された「支配的民族-階級」の概念から「システム進化の徴候」として適切に説明されるようには思われない。

もしも、「支配的民族-階級」がアケメネス朝帝国支配層の在り方を示すモデル概念であれば、上述の批判をかわすことができるかもしれない。しかし、ブリアンはそれをモデル概念として適用していないし、おそらくまた、そのようなものとして構築する意図を有していなかった。

「支配的民族-階級」の概念は、ブリアンによれば、「きわめて操作的価値を保持する他の概念、すなわち、アジア的（あるいは貢納制的）生産様式概念と両立し得る」（1988：138）のものである。したがって、これら二つの概念の関係について考察されなければならないかもしれない。しかし、ここではその余裕がないし、その議論はあまり生産的ではないであろう。私には、アジア的＝貢納制的生産様式なる概念が、それほど操作的であるとは思われない。それよりも、セレウコス朝に適用された「支配的民族-階級」概念とアケメネス朝に適用されたそれとの間の関係について、吟味してみる必要がある。



個々の適用にさいして、概念内容がまったく同じでなければならないことはなく、具体例にそくして相互に異同はあり得る。しかし、本質的な部分について相違が指摘されるようであれば、その概念の有効性は疑われるであろう。セレウコス朝の場合に挙げられていた、土着の被征服民を排除した、閉鎖的な、民族的に同質な、政治的-経済的特権を享受する支配的少数者層、という「支配的民族-階級」の諸要素は、アケメネス朝の場合でも概して共通しているようにみえる。アケメネス朝の場合には、セレウコス朝において観察されなかった諸特徴が、いくつか付け加えられている。その異同の多くは、おそらく許容される範囲のうちに含まれるかもしれない。

しかしながら、支配的少数者の構成において、両者にいちじるしい相違が認められることは無視できない。セレウコス朝の場合は市民共同体であり、ギリシア・マケドニア人には絶えず加入が認められていた。それに対して、アケメネス朝の場合は身分制社会であり、しかも一般大衆のペルシア人は除外されていた。このような相違は本質的な意味を有しない、という見解も可能である。なぜなら、アジア的=貢納制的生産様式の社会においては、どのような内部構成をとろうとも、支配的共同体の役割はつねに変らない、と考えることができるからである。そのような理解は、それなりに正しさを含んでいる。もしそうであれば、内実は問われず、カプセルだけを対象にすれば良いことになる。しかし、アケメネス朝においては、セレウコス朝ほどカプセルの殻は固くなく、膜を通して相互に滲透しあう傾向を有していた。ブリアン自身、セレウコス朝の植民市に基づいて構想された「支配的民族-階級」概念をアケメネス朝に適用するために、かなりの修正を加えているが、それは必ずしも成功しているようには思われない。

アケメネス朝帝国のダイナミクスを解明しようとした第3回研究集会のブリアン報告は、内容そのものに関しては、きわめて魅力的である。しかし、その興味深い説明は、「支配的民族-階級」概念の適用によって得られたというよりは、それ以上に、彼自身の幅広い学際的な関心と研究に基づくものであったと考えられる。なぜなら、少なからぬ部分において、概念にかかわりなく事実が適切に叙述され、彼が概念にこだわって論を進めているところに、かえって多

くの疑問が感じられるからである。

〔引用文献〕

- AH I H. Sancisi-Weerdenburg (ed.), *Achaemenid History I. Sources, Structure and Synthesis*, Leiden, 1987.
- AH II H. Sancisi-Weerdenburg and A. Kuhrt (eds.), *ibid. II. The Greek Sources*, Leiden, 1987.
- AH III A. Kuhrt and H. Sancisi-Weerdenburg (eds.), *ibid. III. Method and Theory*, Leiden, 1988.
- AH IV H. Sancisi-Weerdenburg and A. Kuhrt (eds.), *ibid. IV. Centre and Periphery*, Leiden, 1990.
- AH V H. Sancisi-Weerdenburg and J. W. Druvers, *ibid. V. The Roots of the European Tradition*, Leiden, 1990.

Briant, P.

*RTP Rois, tributs et paysans. Études sur les formations tributaires du Moyen-Orient ancien*, Paris, 1982.

[1978] Colonisation hellénistique et populations indigènes. I. La phase d'installation, *Klio*, 60.

[1981] Appareils d'état et développement des forces productives au Moyen-Orient ancien : le cas de l'empire achéménide, *La Pensée*, février.

[1982] Colonisation hellénistique et populations indigènes. II. Renforts grecs dans les cités hellénistiques d'Orient, *Klio*, 64.

1987 Pouvoir central et polycentrisme culturel dans l'empire achéménide. Quelques réflexions et suggestions, *AH I*, pp.1~31.

1988 Ethno-classe dominante et populations soumises dans l'empire achéménide : le cas d'Égypte, *AH III*, pp.137~173.

Weiskopf, M.

1989 *The so-called "Great Satraps' Revolt", 366-360 B. C. concerning Local Instability in the Achaemenid Far West*, *Historia Einzelschriften*, Heft 63, Stuttgart.

佐藤 進

1990「アケメネス朝ペルシア帝国史研究の一動向」『オリエント』33-1, 148-157頁.  
(年代が [ ] 内に記されたブリアンンの論文は、いずれも *RTP* 収載。引用頁数も同書に拠る。)